様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０３４

研究課題名（和文）生きている信仰・カクレキリシタンの文化遺産化と世界遺産の影響に関する民俗学的研究

研究課題名（英文）A Study on Kakure Kirishitan (Hidden Christians) as cultural heritage and influence on Kakure Kirishitan of the world heritage registration campaign in Nagasaki

研究代表者
才津　祐美子（SAITSU, Yumiko）

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：４０４１２６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現在もなお生きている信仰である長崎県下のカクレキリシタンをめぐる文化遺産化の問題を主題としたものである。本研究ではまず、長崎市外海地区のカクレキリシタンの変遷と現状について明らかにした。外海地区において行ったフィールドワークから見えてきたのは、カクレキリシタンは近年大きく変化しているということだった。次に、オラショ(祈祷文)の公開に焦点を当てながらカクレキリシタンの文化遺産化と継承について考察した。さらに、近年活発に行われている「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録運動と同運動のカクレキリシタンへの影響について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study was performed to analyze that Kakure Kirishitan (Hidden Christians) of Nagasaki Prefecture had been treated as cultural heritage. To begin with, it clarified the changes and the present conditions of Kakure Kirishitan of Sotome area in Nagasaki City. According to the fieldwork in Sotome area, Kakure Kirishitan greatly had changed in late years. Then, I investigated that Kakure Kirishitan had been treated as cultural heritage while focusing on an exhibition of Oratio (words of prayer) . Lastly, this study examined the world heritage registration campaign of "Churches and Christian Sites in Nagasaki " and the influence that the campaign gave to Kakure Kirishitan.

研究分野：人文学

キーワード：民俗学　文化遺産　カクレキリシタン　世界遺産　宗教

１．研究開始当初の背景

江戸時代のキリスト教徒たちが約 260 年もの間潜伏し続けた（潜伏キリシタン）ことや、禁教令が解かれた後も潜伏時代の信仰形態を保持し続けている人々（カクレキリシタン）がいるという事実は、明治以降宗教学や民俗学をはじめとする多くの研究者の耳目を集めてきた。そうした研究によって明らかにされてきたのは、カクレキリシタンたちが潜伏キリシタン時代から継承している信仰形態は、江戸初期のカトリックそのものではなく、さまざまな土着の宗教と結合した混成的なものであるということだった（古野清人 1959 年『隠れキリシタン』至文堂、宮崎賢太郎 1996 年『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会など）。

ところが、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（以下「長崎の教会群」）の世界遺産化の動きの中ではこの点が矮小化され、「約 260 年間信仰を守ってきた」という点のみが評価の対象となっている。この教会群の多くは潜伏キリシタンだった人々が明治以降キリスト教（カトリック）に復帰し、建設したものである。それぞれの教会は規模も小さく、建築物そのものの評価は決して高くはない。そこに「長い迫害の時期を経て復活した」という歴史が付与されるからこそ、世界遺産として登録する「顕著で普遍的な価値」があるとみなされ、また世界遺産登録へ向けてそうしたアピールがなされている。しかし、潜伏キリシタンは全員がカトリックになったわけではなく、その一部は近代以降もなお潜伏時代の信仰形態を守るカクレキリシタンとなった。それは今もなお受け継がれる「生きている信仰」である。それにもかかわらず、世界遺産化という大きな流れの中においては、現在のカクレキリシタン習俗は潜伏キリシタン時代を知る手がかりとしてのみ評価され、あくまでも教会群を建設したカトリック信徒たちの歴史（過去）や後景として読み替えられるのである。

研究代表者は「長崎の教会群」の世界遺産化の動きがはじまった 2000 年から断続的に調査を行ってきたことに加えて、2008 年 6 月から 2012 年 3 月まで長崎市外海地区文化的景観保存計画策定委員会委員を務め、現存するカクレキリシタンに関しても聞き取り調査をする機会を得たことで、この読み替えが着々と進んでいることに気づくとともに危機感を覚え、本研究を遂行する必要性を強く認識するに至った。なお、「長崎の教会群」の世界遺産化に関しては、宗教関連施設を観光資源化することの問題を取り上げた研究がいくつか存在する（山中弘 2012 年「新しい巡礼の創出：長崎カトリック教会群の世界遺産化」『宗教研究』85(4) pp.1346-1347、松井圭介 2013 年『観光戦略としての宗教』筑波大学出版会）が、現存するカクレキリシタンとの関係についての研究は行われていない。

一方、こうした世界遺産登録の動きとは別に進んでいるカクレキリシタン習俗自体の文化遺産化もまたカクレキリシタンを取り巻く現状の一端であるが、こうした状況に関する断片的な報告はある（前出［松井 2013］）ものの、それを正面から捉えた研究は現在のところ行われていない。

２．研究の目的

本研究は、現在もなお生きている信仰であるカクレキリシタンをめぐる文化遺産化の問題を主題とする。本研究の第一の目的は、現在長崎県で進んでいる「長崎の教会群」の世界遺産化がカクレキリシタンへもたらす影響について明らかにすることである。また、こうした世界遺産化の動きの一方で、カクレキリシタンの数が減少し、消滅の危機に瀕していることから、秘蔵していたものを博物館等に寄付したり、博物館で観光客を前に「オラショ」（祈祷文）を唱えたりする動きも見られる。こうしたいわば失われゆくカクレキリシタン習俗自体の文化遺産化の実態を明らかにすることもまた急務であり、それが本研究の第二の目的である。

３．研究の方法

本研究では、２で述べた、現存するカクレキリシタンとそれを取り巻く世界遺産化・文化遺産化の関係を明らかにするために、長崎県内数カ所（長崎市外海地区・平戸市平戸島および生月島）における聞き取り調査を中心に研究を遂行する。なかでも長崎市外海地区を主たる調査地とし、調査期間中の各年度を通じて現地における聞き取り調査を行い、外海地区のカクレキリシタンの歴史と現状についてその詳細を明らかにする。また、それと並行して文化遺産化が進んでいる平戸市でも聞き取り調査を実施し、文献資料も含めて外海地区との比較・分析を行う。さらに、調査期間中を通じて、世界遺産化の影響について随時調査（聞き取り調査および文献資料調査）を進める。

４．研究成果

(1)長崎市外海地区のカクレキリシタンの変遷と現状について

１で述べたように、潜伏キリシタンやカクレキリシタンの存在は多くの研究者の関心を呼び、田北耕也の研究を筆頭に、綿密なフィールドワークによる報告も複数存在する（田北耕也 1954 年『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、古野清人 1959 年『隠れキリシタン』至文堂、片岡弥吉 1967 年『かくれキリシタン－歴史と民俗』日本放送出版協会など）。ただし、それら先行研究の多くは、カクレキリシタンの調査をしつつも、そこから潜伏時代のキリシタンの在り方を究

明することに力点がおかれていた。それは近年の研究においても変わらない傾向である（宮崎賢太郎 2014 年『カクレキリシタンの実像－日本人のキリスト教理解と受容』吉川弘文館、中園成生 2015 年『かくれキリシタンとは何か』弦書房）。しかし、本研究において行った外海地区に現存するカクレキリシタンに関するフィールドワークから見えてきたのは、近代以降カクレキリシタンは大きく変化しているということだった。

この変化を示す顕著な事例が長崎市外海地区下黒崎において毎年 11 月 3 日に行われている「枯松神社祭」である。本祭は 2000 年にはじめられた新しい祭りであるが、この祭りの主催者は、下黒崎のカクレキリシタン（現在の自称は旧キリシタンもしくはかくれキリシタン）と今では仏教徒になっている元カクレキリシタン、そしてカトリック黒崎教会の 3 者である。カトリック教会が「神社」の祭りを主催するというのは奇妙な感じがするかもしれないが、本祭りを発案し、主導したのは、1998 年に黒崎教会に赴任してきた野下千年神父だった。

野下神父は黒崎教会に赴任後、もとは同じ潜伏キリシタンを祖先に持つ人々が明治以降袂を分かち、今なお感情的な軋轢があることを知ったのだが、2000 年の大聖年にローマ教皇が「わかれた兄弟との対話」を呼びかけたことに触発されて、3 者で合同慰霊祭をすることを思いついたという。また、枯松神社という歴史的、信仰的な遺産が、3 者の心を一つにする拠点になりうるのではないかとも思ったらしい。枯松神社が「神社」となったのは 1914 年頃のことで、もともとは「枯松様（さん）」や「サンジュアン（サンリアン）様（さん）」、「おたけ」と呼ばれていた、カクレキリシタンの大切な霊場だったからである。そこはジュアン（ジワン）という宣教師の墓であると伝えられている。

こうした野下神父の呼びかけに応じたのが下黒崎迫のカクレキリシタンの代表（帳方）を務めていた村上茂さんだった。村上茂さんは外海地区のカクレキリシタンの帳方ではじめてオラショを声に出して唱えるようになった人であり、カトリックにも造詣が深かった。枯松神社祭でもオラショを声に出して奉納することになり、マスメディア等の注目を集めることになった。枯松神社祭はまず野下神父をはじめとするカトリック黒崎教会と村上茂さんが帳方を務めるカクレキリシタンのグループによってはじめられたのである。村上茂さんは 2005 年に亡くなったが、帳方としての役割も枯松神社祭への参加も息子の茂則さんに引き継がれている。

第 2 回枯松神社祭（2001 年）終了後、カトリック黒崎教会とカクレキリシタンに下黒崎在住の元カクレキリシタン（現仏教徒）によって結成された「枯松神社を守る会」が加わって、「枯松神社祭実行委員会」発足した。ここに 3 者がそろったのである。

枯松神社祭の際に参拝者に配布されるリーフレットでは、開催趣旨を「迫害時代、あらゆる苦難をしのぎ、信仰の指導をして下さったサン・ジワン様と信仰を今日に伝えた先祖たちの遺徳を讃え、感謝を捧げ、ご冥福を祈る」、「外海キリシタンの歴史と文化を継承し、地域の平和と発展を祈る」と述べている。

この祭りが創出されたことは、3 者の関係性のみならず、下黒崎という範囲を超えて、様々な方面に影響を与えている。具体的には①枯松神社のメジャー化やイメージの定着、②「共通の祖先」につながる集合的記憶の醸成、③カクレキリシタン同士の接近・交流、④外部からのカクレキリシタンへの接触機会の増加、⑤カクレキリシタンを文化遺産としてとらえる動きなどが影響としてあげられる。さらに、こうした影響の背景には、「長崎の教会群」の世界遺産登録運動の活発化がある。

(2) カクレキリシタンの文化遺産化と継承について

長崎市外海地区と平戸市生月島のカクレキリシタン習俗には様々な差異があることがわかっているが、その一つに祈りの言葉「オラショ」がある。生月島のオラショは、外海地区と違って従来から声に出して唱えていたこともあって、早くから録音や公開が進んだようである。独特の節回しで唱える「歌オラショ」（のちにグレゴリオ聖歌を原曲とすることが判明する）が含まれていることも注目を集めた理由の一つだろう。

1951 年には NHK によって録音され、部内資料用 SP レコードが作られている（この音源は現在公開されている）。また、田北耕也も同時期以降何度か録音していることがわかっている。

オラショがはじめて一般に公開されたのは、1977 年 7 月のことだった。場所は国立劇場である。当時の新聞記事（「長崎新聞」1977 年 7 月 9 日付）によれば、出演者の一人は「オラショが外部に公開される時代がきて神様も喜んでいるでしょう。これをきっかけに生月に多くの観光客が来るようになるかもしれないが、簡単に外部の人に聴かせるものではない」と述べている。しかし、1995 年に生月島で開館した博物館「島の館」では、カクレキリシタン習俗が展示の中心テーマの一つとなっていて、一角では常時オラショが流されている。また、「島の館」では、1996 年から年 2 回のペースでオラショ公演が行われている。そしてこの頃から島外でのオラショ公演も増えていく。2001 年にはオラショのすべてを録音した CD が制作され、販売されている。

こうした一般への公開や博物館での展示・公開が行われている状況を本研究では「文化遺産化」と呼んでいるわけだが、こうした状況が 1990 年代に急速に進んだ背景には、やはりカクレキリシタン人口・グループ

の減少等、大きな変化があったと考えられる。おそらく今後も「従来通りの信仰」を維持するための組織の存続は一層厳しくなってくるものと思われる。ただし、今後「文化遺産」として習俗の一部（オラショ）を維持するために新たな組織が形成されることはあり得るのかもしれない。(3）で述べる「生月島キリシタン伝承会」はその萌芽とも考えられる。

一方、外海地区では、1979 年に出津文化村の施設の一つとして外海町立歴史民俗資料館(現長崎市外海歴史民俗資料館）が開館している。展示内容は縄文時代の遺跡から 2001 年に閉山した池島炭鉱の資料まで多岐にわたるが、カクレキリシタン関係の資料も含まれており、センサーに反応してオラショが流れるようになっている。

2015 年に下黒崎迫の前帳方村上茂さんの伝記（ムンシ、ロジェ・ヴァンジラ 2015 年『村上茂の生涯』聖母の騎士社）と朗読 CD が発売されたが、それには村上茂則さんが唱えるオラショも収められている。村上茂則さんは 2006 年に帳方になって以来、マスメディアや研究者の取材（聞き取り調査）を多く受けてきたが、現在のところ行事の記録撮影等は拒んでいる。村上茂則さんはその理由として「自分たちは信仰であって、見世物ではない」ことや「まだ大丈夫だし、今後もなくすつもりはない」ことをあげていた。

また、外海地区出津のカクレキリシタンの帳方である K さんは、2012 年から枯松神社祭に参加しているが、取材（聞き取り調査）にはほとんど応じていない。

(3)「長崎の教会群」の世界遺産化とその影響について

長崎県に点在する教会群を世界遺産にしようとする動きは、2000 年からはじまった。2001 年に発足した「長崎の教会群を世界遺産にする会」を中心的に、行政や地元企業、教会、研究者等を巻き込みながら登録運動が展開され、2007 年には「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として暫定リストに記載される。2013 年 8 月に開催された文化庁の文化審議会において同年度中の推薦候補とされたものの、内閣官房地域活性化統合事務局の有識者会議で「日本の近代化産業遺産群－九州・山口及び関連地域」(2013 年 8 月時点での名称）が推薦候補とされ、「長崎の教会群」の推薦は先送りとなった。翌 2014 年 7 月開催の文化審議会において再び推薦候補として選ばれ、2015 年 1 月に正式な推薦書が UNESCO に提出された。

暫定リスト追加記載候補として 2006 年に長崎県が文化庁に提出した提案書の段階では、①歴史性・精神性の象徴としての教会群とその関連遺産、②優れた文化的景観（自然地形・生業・精神性)、③教会群の建築学的特性の 3 点が「長崎の教会群」の価値として示されていた。しかし、暫定リスト記載後は、価値の力点の置き方が変化していく。教会を建てた人々に繋がる歴史－禁教期の潜伏キリシタンにも目が向けられるようになるのである。2015 年 1 月提出の推薦書で示された「長崎の教会群」の構成資産は 14 件であるが、その内訳は「16 世紀の東西交流とキリスト教の伝播を示す『城跡』」2 件、「16 世紀からの信仰が禁教下にも密かに継承され人々の生活に浸透していたことを示す『集落』」4 件、「19 世紀の再宣教により長崎地方各地の集落に建てられた『教会建築』」8 件となっている。このうちの「集落」が禁教期を示す構成資産であり、その大部分が暫定リスト掲載後に構成資産となったものである。

しかし、禁教令撤廃後も潜伏時代の信仰形態を保持し続けている現在のカクレキリシタンは、これらの構成資産から除外された存在である。にもかかわらず、マスメディアからは実質的に関連資産として扱われ、「長崎の教会群」の世界遺産登録が近づくにつれてカクレキリシタンへの取材依頼が相次いでいる。近年にわかにカクレキリシタン関係の出版物が増えているのも当然このことと深く関わっている。本報告書の 1 で「現在のカクレキリシタン習俗は潜伏キリシタン時代を知る手がかりとしてのみ評価され、あくまでも教会群を建設したカトリック信徒たちの歴史（過去）や後景として読み替えられる」と述べたが、本研究期間中においてもその傾向がますます強まったことが明らかになった。

もっとも、こうした状況をカクレキリシタンたちは肯定的に受け止めているようである。例えば、平戸市では 2015 年 3 月に「『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』推薦記念生月島かくれキリシタン信者と行く平戸巡礼」が「生月島キリシタン伝承会」主催（共催：平戸市、後援：長崎県）で行われた。この「巡礼」の最大のポイントは、構成資産の一つである「平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳)」の安満岳頂上にある「奥の院様」に「生月島キリシタン伝承会」とともに参詣し、同会会員が感謝のオラショを唱えるのを間近で見学できることだった。ただし、この「生月島キリシタン伝承会」は、すでに解散した旧元触辻垣内の信者であった T さんが新たに結成したもので、会員は同垣内に属していた数名だという。また、生月島のもともとのカクレキリシタン信仰ではこのような形で安満岳に参詣することはなかったが、T さんの発案でこのようなことを行った。T さんは、安満岳や春日集落、中江ノ島といった構成資産は一見インパクトがないから、印象づけるためにはわれわれキリシタンという無形の文化遺産が必要だと述べていた。また、安満岳と春日集落といった構成資産同士を結びつけるのは、昔からのやり方でやっている生月のキリシタンしかないとも語っていた。

これに対して、推薦書で提示された構成資産とは直接的な関係がない外海地区の村上

茂則さんは、近年増え続けているマスメディア等からの取材を積極的に受けている。また、先述したように、村上さんは枯松神社祭の際にオラショを奉納しているが、普段でも観光客に頼まれて枯松神社でオラショを唱えることがあるという。そして村上さんもやはり「長崎の教会群」の世界遺産としての価値は潜伏期にあると考えており、それをそのままの形で継承しているのは自分たちであると自負している。

このように、カクレキリシタンたちにとって禁教期の潜伏キリシタンの「価値」が認められることは自己の肯定につながっている。それゆえ、複雑な感情があるであろう「長崎の教会群」の世界遺産登録にも前向きな姿勢を示しているものと思われる。

(4)本研究成果のまとめと今後の展望

(1)～(3)で示したように、本研究では文献資料調査とともに、現地調査および聞き取り調査を積極的に行うことで、カクレキリシタンの文化遺産化を含む現状と、「長崎の教会群」の世界遺産登録運動がカクレキリシタンに与える影響について明らかにした。こうした研究はこれまでほとんど行われておらず、学術的意義が非常に高い。

ただし、研究期間終了間際になって予想外の事態が生じた。「長崎の教会群」は、順調にいけば 2016 年 7 月に開催される世界遺産委員会で世界遺産リストへの登録が決定するはずだったが、2016 年 1 月の ICOMOS の中間報告で、このままでは 2016 年の登録は難しいという通知を受けたのである。これによって 2 月 9 日に「長崎の教会群」の推薦取り下げが閣議決定された。日本が推薦した世界遺産候補の取り下げは、2013 年の「武家の古都・鎌倉」以来 2 例目であるが、「鎌倉」が未だに再推薦されていないことを考えると、この事態は深刻だといえる。

中間報告における ICOMOS の指摘事項は多岐にわたるが、本研究との関連でいえば、「禁教期の歴史的文脈に焦点を絞った形で推薦内容を見直すべきである」という指摘が重要だと思われる。この指摘は「2 世紀以上もの間禁教と迫害を耐え忍んだことに日本のキリスト教コミュニティの特殊性がある」という ICOMOS の認識からきている。これはすなわちそこにこそ世界遺産に求められる「顕著で普遍的な価値」があるということだが、その証明のためには禁教期（＝潜伏キリシタンの存在）を示す物理的な証拠が必要とされる。そしてそれを揃えることはそんなに簡単なことではない。

長崎県世界遺産学術委員会は、構成資産の見直しは行わず、推薦書の記述を修正した素案を作成し、3 月末に文化庁に提出した。今年度に再推薦を受け、2018 年に登録されるという最短ルートを目指すため、このような駆け足での素案作成となったようだが、ICOMOS の指摘事項はそれでクリアできる程度のものだったのか疑問が残るところである。

今後、少なくとも構成資産の見直しは行わなくてはならなくなるだろう。また、禁教期の物証をいかに提示するかという点では、まだまだ検討の余地があるように思われる。一方で、禁教期に焦点が当てられることになったため、これまで以上にカクレキリシタンに注目が集まることになるだろう。したがって、本研究の今後の展開としては、引き続き「長崎の教会群」の世界遺産登録に向けた動きとそのカクレキリシタンへの影響について考察することをあげておきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

<u>才津 祐美子</u>、枯松神社祭の創出と旧カクレキリシタン（かくれキリシタン）、日本民俗学会第 67 回年会、2015 年 10 月 11 日、関西学院大学（兵庫県西宮市）

〔図書〕（計１件）

<u>才津 祐美子</u> 他 13 名、慶應義塾大学出版会、鈴木正崇編、東アジア研究所講座　アジアの文化遺産－過去・現在・未来、2015、pp.359-386

６．研究組織

(1)研究代表者

才津 祐美子（SAITSU, Yumiko）
長崎大学・多文化社会学部・准教授
研究者番号：40412613